〈産院〉にて

天沢退二郎

がらんと白ちゃけた待合室の
六つ並んだ車輪つきベッドに
よこたわっているのは
どれも出産のさしせまった妊婦で
もちろん他の五人はみな女なのに
なぜかわたしだけ男である

いやまったく男のくせして
なぜわたしだけ女房に孕ませられてしまったのか
まったくなさけないやら
はずかしいやら

しかしそれよりも気になるはなしは
他の妊婦たちは次々に産気づいて
ひとりまたひとり
別室へ運ばれていくというのに
わたしだけ一向に産気づくけはいがない
もうわたしより先に来たのはあらかたいなくなって
あとから来た女までが

産気づいたらしいじゃないか！
いくらあせって 腹をさすってみたり
わざといきんでみたりしても
中でうごくけはいなどまったくない
だいたいからして
たいしてふくれてもいないじゃないか
いったい本当に妊んだのだろうか？

そう疑い出すと気が気でなくて
ためしにトイレに入りもういちど
さすったりいきんだりしてみたが
なんだ、こんなの妊娠なんかじゃないや
すっかり興醒めして
だまって退院して家へ戻ってみると
ジーパン姿でかいがいしく
働いていた女房のやつ
にっこりわらって
「あらそうだったの おつかれさま
お茶でもどう？」